

7 礼服のあり方

静岡女子短大 柳原 文一

1 礼服については在来の有職故実を細々と調べ上げてそれに従わねばならぬとする考え方があると共に、礼服不要論もあり、実情も余りに混乱している。そこで私は「礼服は必要か否か、不要ならば如何なる態度をとるべきか、礼服は必要ならば如何にあるべきか」について種々の方面より研究し、衣生活の正しい方向を見出そうとした。

2 文献及び思索により主として倫理的・社会心理学的に研究した。そしてここには儀式服のみならず社交用服全般に亘って述べる。

3 礼服は実用よりも装飾的意義を持つのが、歴史的には下級礼服が次第に上級礼期にとって代り、簡素化の方向を辿って来た。そしてその性質としては伝統、雰囲気及び他人との協調性を持つべきであるが更にそこに各人の趣向を加えた方がよいと思われる。又戦時中制定された国民服は何故用いられなくなったかについても考察を加えた。結論としては、「儀式が主に形式的、呪術的なものである以上、礼服という特殊なものがあつた方がよい。特別に礼服のない場合はふだん着や作業衣でない被服を着用して臨むべきである」という事になる。